

はじめに

本書は、カシオ計算機株式会社（以下、カシオ）と武蔵野美術大学（以下、ムサビ）による産学共同プロジェクトの3年間の歩みを記録したものです。本プロジェクトは、日本語教育の一環として取り組まれ、留学生、日本人学生、教員、企業、そして社会全体が学び合いながら多文化共生とは何か、多文化化する社会において私たちにできることは何かを考えていくことを目的としています。

私たちは、「にっぽん多文化共生発信プロジェクト」と銘打ち、日本の多文化社会を支えている人々たちへの取材を通し、現場の声、そして、自分たちが感じたことや発見したことを映像にして発信してきました。このプロジェクトを通じて私たちが学んだことを共有すること、さらに本書による発信を通じて、学び合いの場を拡張し、一人でも多くの方が多文化社会に主体的に参加し、その一員として共に生きる社会をつくっていくことが本書の目的です。

産業を担う企業と、学問を担う大学が連携し、取り組む事業を「産学連携」、あるいは「産学共同」「産学協同」（以下、産学）といいます。本書もこの産学の一つであり、言語教育における産学の先駆的な事例と思われる。一般的に産学による事業は、研究目的と教育目的のものに分けられます¹⁾。研究目的の産学は、大学の基礎研究と企業の応用研究を結集し、イノベーションを生むような開発事業です。理系の大学院を中心に行う産学、たとえばモノづくりをするようなプロジェクトが想像しやすいでしょう。一方、教育目的の産学は、大学において批判的思考力を高め、知的な創造力を育

成する上で企業の現場の知を活用するというもので、企業側には、現場で活躍できる人材を育成するという目的があります。

本プロジェクトは、教育目的の産学にあたります。ただし、企業の現場の知を活かし、企業で活躍できる人材育成を直接的な目的とするのではなく、日本がこれからめざす多文化共生社会という、ある意味、未知の世界への道を、産学で連携しながら探究していくプロジェクトです。モノの開発は行いませんが、遠くに「新しい価値＝コト」のデザインを見据えた取り組みです。

また、このプロジェクトの大きな特徴は、大学の日本語のクラス、つまり日本語教育として実践していることです。従来、産学は、理工系、経営系の教育機関で積極的に行われてきました。ムサビでもデザイン系を中心に産学を展開しています。ことばの教育が産学に取り組んだ例は、非常に限られていると言います。しかし、新しい時代へ向けた「対話」への社会的ニーズは高まっており、企業が学生に求める社会人基礎力においてもコミュニケーション能力は重要な位置を占めています。社会全体でコミュニケーションを学び、社会全体が対話を保障、推進するようになるために、いわば、社会自体がコミュニケーション能力を獲得するために、皆が学び合う場として産学共同プロジェクトが非常に有意義であると私たちは考えます。

本書は、以下のような方と、私たちの経験を共有したいという思いから執筆されています。

・産学連携について関心がある人

- ・ 日本語教育に関心がある人
- ・ コミュニケーションに関心がある人
- ・ プロジェクトワークやアクティブ・ラーニングに関心がある人
- ・ 多文化共生に関心がある人
- ・ 外国人人材と共に仕事をしている人

本書の1章では、今回の産学がいかにして企画されたのか、そして、どのような教育的背景を持った取り組みなのかを説明します。2章から4章では、3年間のプロジェクト実践を紹介します。5章は、映像制作の立場から見たプロジェクト全体の意義について論じます。6章は、ムサビとカシオのメンバーを交えた座談会の記録です。特に企業側から見たこのプロジェクトについて述べています。7章では、3年間の経験を総括し、改めて産学で言語教育に挑戦する意義と、取り組み際に意識すべき点をまとめています。なお本書は、これから産学連携や多文化共生の事業、あるいは日本語教育に携わる人と、現場での経験を共有したいという想いから、著者の視点や主観的な感想、エピソードなどを意識的に記述するようにしました。時に冗長と感じられるかもしれませんが、ご容赦ください。

注

(1) 清成忠男 (2000) 「産学連携…意義と限界」『組織科学』34 (1)、4-11.

目次

はじめに i

第1章 社会でことばを学ぶ、社会がことばを学ぶ 1

多文化共生への「もうちょっとの勇氣」(小川宗之) 24

第2章 MAU 日本語学習支援プロジェクト2017 29

日本語教育による多文化共生への一歩(トウ・キシヨウ) 52

過去を足場に、現在に立ち、未来を考える(イ・ヨンゴン) 54

産学連携から企業も学ぶ(小川宗之) 56

第3章

にっぽん多文化共生発信プロジェクト2018	59
-----------------------	----

誰でも自分のストーリーの主人公（エン・シャクカン）	98
---------------------------	----

尖った部分をさらに極める（シン・ハンソプ）	100
-----------------------	-----

現場の取材を通じた学びと感動（吉田修作）	102
----------------------	-----

第4章

にっぽん多文化共生発信プロジェクト2019	105
-----------------------	-----

芸術で社会に与えられることは何か（内田久美子）	144
-------------------------	-----

「ひとつなぎ」から始まる多文化共生（梶野結暉）	146
-------------------------	-----

どっぴり入り込んで見えてきたこと（大塚 功）	148
------------------------	-----

ありのままの違いを認める（キム・ドヒ）	150
---------------------	-----

第5章

映像とことばの関係性	153
------------	-----

チームワークって多文化共生ですね（西村茉莉子）	192
-------------------------	-----

第6章	「座談会」カシオにとっての産学、ムサビにとっての産学	195
-----	----------------------------	-----

第7章	言語教育としての産学共同プロジェクト	215
-----	--------------------	-----

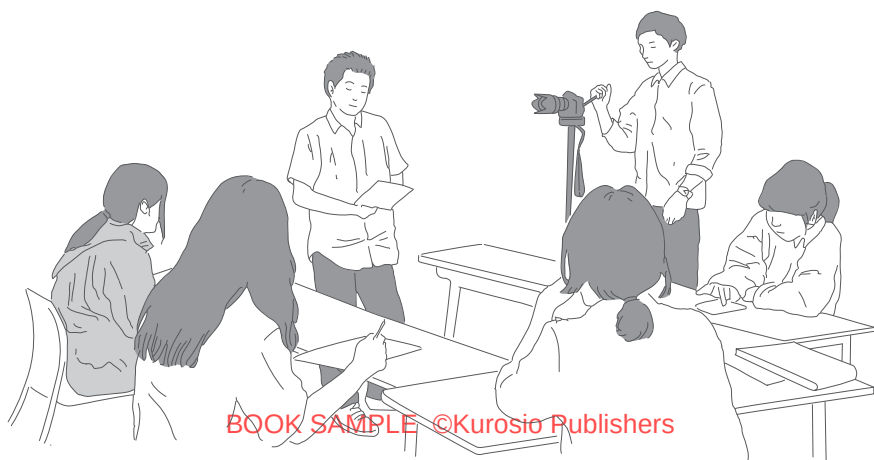
	おわりに	237
--	------	-----

第

1

章

社会でことばを学ぶ、社会がことばを学ぶ



1. カシオとムサビがタッグを組んだ

なぜ、カシオとムサビがこのプロジェクトを始めることになったのか。そのきっかけは、2016年春の日本語教育学会でした。当時、私（三代）は、社会の問題をコミュニケーションで解決することを学ぶ実践として公共CMを制作するという日本語の授業を行っていました。^①留学生から見た日本社会の課題を探り、その課題を改善するためのメッセージを公共CMという形で表現する実践です。ある学生たちは、フリーハグをモチーフに、文化を超えて心をつなぐ大切さを伝える映像をつくりました（写真1-1）。

この実践について学会で発表したところ、懇親会で研究者とは異なる匂いを放つ男性が声をかけてきました。最初は教材のセールスかと思い、警戒しつつ名刺を受け取ると、そこに「カシオ計算機・小川宗之」とありました。これが小川さんと私の出会いであり、このプロジェクトが動き出す最初のきっかけとなりました。小川さんは、映像制作という実践に新しい日本語教育の可能性を感じ、カシオとムサビで一緒に何かできないかとわくわくするような提案をしてくれました。

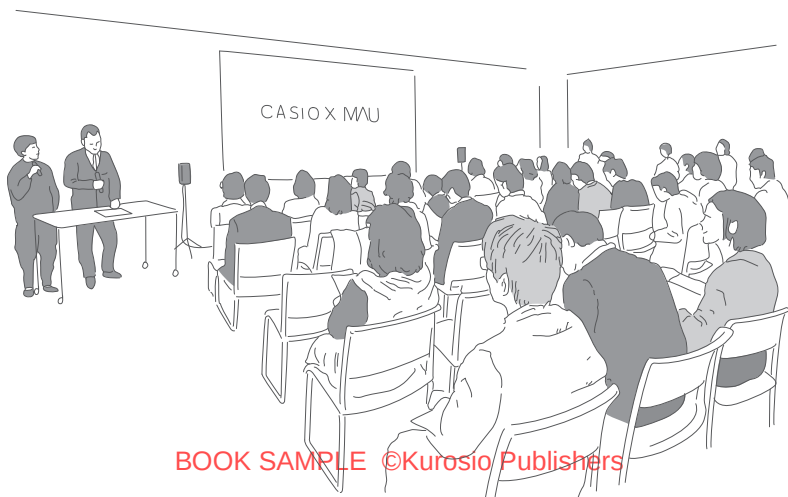
当時、小川さんは、カシオで電子辞書の商品企画を担当していました。海外での、特にASEAN地域での日本語学習熱の高まりから、日本語学習教材を搭載した日本語学習電子辞書の開発に携わっていて、日本語教育に大変高い関心を持っていました。小川さんの情熱に背中を押される形で、このプロジェクトは始まりました。何回か打ち合わせを重ね、日本留学の魅力を伝えるCMを制作するこ

第

2

章

MAU 日本語学習支援プロジェクト
2017



「MAU 日本語学習支援プロジェクト」 2017 年度 成果発表会プログラム

日時：2018 年 1 月 31 日

場所：武蔵野美術大学デザイン・ラウンジ

開会宣言

来賓挨拶／ムサビ側挨拶／カシオ側挨拶

発表 1 「私の日本生活」

制作：〈三国会談〉

コメント、質疑応答

発表 2 「ジャパライブ」

制作：〈ジャパライブ〉

コメント、質疑応答

発表 3 「よろしく」

制作：〈一八〉

コメント、質疑応答

発表 4 「ME IN JAPAN」

制作：〈Freedom〉

コメント、質疑応答

発表 5 「CASIO × MAU 産学共同プロジェクト 2017」

制作：芸術文化学科 米徳ゼミ

コメント、質疑応答

来賓より総評／カシオ側総括／記念品・修了証の贈呈

記念撮影・閉会宣言

何より今回の授業を通して、最も印象的だったのは、初めて企業の方にプレゼンテーションする体験だ。企業の方はやはり先生とまったく違う視点や考えを持っていると感じた。ディテールよりコンセプトや全体的なイメージを見ている気がした。学内という私たち学生にとって慣れている環境は、実は社会にとってほんの小さな一部に過ぎないことに気づき、産学共同プロジェクトの意図が少しわかった気がした。

—— 中国人留学生

2017年度に取り組んだ1年目のプロジェクトは、すべてが手探りでした。私たちに何ができるのか、何をすべきなのかを知るための1年目だったと言えます。成果も大きかったですが、反省もたくさん残りました。その反省が大きな成果ともいえる1年でした。そして、何よりも重要なことは、最後に来年もまたやりたいと思ったことです。

1. 共につくるということ

共に何かをつくるということ。これがことばを学ぶ活動の中心にあると考えています。1章で社会参加の過程に学びがあったりましたが、この社会とは、身の回りの小さなコミュニティから日本社会のような大きな社会までを含む、人々が集まり、ある営みを共有するコミュニティを指します。

1年目のプロジェクトで最も重視していたのは、教室という社会Ⅱコミュニティをどうデザイン

第

3

章

にっぽん多文化共生発信プロジェクト

2018



「にっぽん多文化共生発信プロジェクト」 2018 年度 成果発表会プログラム

日時：2019 年 2 月 2 日

場所：武蔵野美術大学デザイン・ラウンジ

開会宣言

来賓挨拶／ムサビ側挨拶／カシオ側挨拶

発表 1 「ひとりじゃない」

制作：〈Y and S〉

取材先代表コメント、質疑応答

発表 2 「アジアをつなげる」

制作：〈MA LINK〉

取材先代表コメント、質疑応答

発表 3 「HERE—もう、ここにあった」

制作：〈大学いも〉

取材先代表コメント、質疑応答

発表 4 「教科書で学べないもの

—にっぽん多文化共生発信プロジェクト」

制作：芸術文化学科 米徳ゼミ

メイキング映像制作コメント、質疑応答

来賓より総評／カシオ側総括／記念品・修了証の贈呈

記念撮影・閉会宣言

取材をするまで、多文化共生ということばを聞くと、文化とはなにか……共に生きるためには……と難しく考えすぎてしまう部分があった。しかし取材したこの日本語学校にあったのは、もっと自由に創造的な多文化共生だった。

実際、取材や授業の中で私自身も多文化共生ができていないのかもしれないと感じている。生まれや育ちの環境はお互い違うのだが、それぞれの得意なことと分担しあってドキュメンタリーを制作している。これが、平澤先生のいう「いつのまにかある多文化共生」なのかもしれない。

— 日本人学生

1年目のプロジェクトのふりかえりをもとに実践を大幅に見直して、2年目のプロジェクトに臨みました。プロジェクトの形と意義の輪郭が見えてきたのが2年目です。

1. ドキュメンタリーをつくろう

CMからドキュメンタリーへ

米徳さんと相談して、2年目はCMではなく、ドキュメンタリーをつくろうということになりました。理由はいくつかあります。

第

4

章

にっぽん多文化共生発信プロジェクト

2019



「にっぽん多文化共生発信プロジェクト」 2019 年度 成果発表会プログラム

日時：2020 年 1 月 31 日

場所：武蔵野美術大学デザイン・ラウンジ

開会宣言／ムサビ側挨拶

発表 1 「私たちが生きる、この国を知る」 制作：〈SHUMai〉
質疑応答

発表 2 「笑顔 to 笑顔—小平市国際交流協会」 制作：〈leel〉
質疑応答

発表 3 「しあわせのレストラン」 制作：〈light〉
質疑応答

発表 4 「つなぐ」 制作：〈3ヵ国協議会〉
質疑応答

発表 5 「きづくをきずく」 制作：〈ENTER〉
質疑応答

発表 6 「今日からできること—5つの軌跡を辿って」

制作：芸術文化学科 米徳ゼミ

メイキング制作コメント、質疑応答

来賓より総評／カシオ側総括／記念品・修了証の贈呈
記念撮影・閉会宣言

私は大勢の前ではもとより、少数の人々の前も親しい人でなければ、自分の意見をよく言えない性格だ。しかし、今回の授業は自分の意見を少しでも発言しないと、前に進めない授業であった。そのため、恥ずかしくて、自信がなくても実際に発言してみると、自分の意見が間違っていたり、恥ずかしがる意見ではなかったことに気付いた。それで今後も、グループ課題があったら、もう少し自信を持って話そうと思った。

— 韓国人留学生

2年目に感じた可能性を形にしていたのが3年目です。2年目の活動の目的と枠組みを踏襲しながら、実践全体をよりシステムティックにして、細部の工夫や改善を心がけました。めざしていたものが輪郭を持ち、手触りを持ってきたとプロジェクトのメンバーが感じる事ができたのが3年目でした。

1. 言語化する

ことばにすることの大切さ

3年目のテーマは、言語化です。ことばにしてみるということ。なぜ、これが大切なのでしょう。オリエンテーションで、私は学生に次のように伝えていきます。

第

5

章

映像とことばの関係性



米徳ゼミ制作の映像作品

「CASIO×MAU 産学共同プロジェクト 2017」

2017 年度作品

時間：12 分 12 秒

スタッフ：中尾峻人、チョウ・ジュンリュウ

作品WEBサイト



「教科書で学べないもの—にっぽん多文化共生発信プロジェクト」

2018 年度作品

時間：23 分 25 秒

スタッフ：亀卦川采音、北原成貴、高橋奈央

作品WEBサイト



「今日からできること—5つの軌跡を辿って」

2019 年度作品

時間：22 分 38 秒

スタッフ：カン・シュンセイ、西村茉莉子

濱中 春、増田夏妃、南 帆香

作品WEBサイト



1. プロジェクトにおける映像の意味

ここまで読んでいただいた方には、このプロジェクトの歩みと内容を大体ご理解いただけたかと思います。この章では、私たちがこのプロジェクトにおいて、情報発信のために選んだメディアである「映像」の意味について考えていきたいと思います。

「日本語学習支援プロジェクト」って何だ？

1章にも記しましたが、私（米徳）はムサビの芸術文化学科に所属し、学科の掲げる「芸術文化を社会とつなげる」というミッションの下、映像デザイン、映像文化、大きくは、ヴィジュアルコミュニケーション（視覚伝達）デザインの研究と教育に携わっています。

三代さんからのプロジェクトのお話があった時に、まず、日本語教育、映像表現、そして企業との協働という構図に興味を持ちました。そして、表現とことばの関係を考える授業を三代さんと一緒にやることから知り得た「実践コミュニティ」という考え方に関心があった私は、ユニークな構図を持ったプロジェクトという形で、この実践コミュニティの場を体験できると期待して参加を決めました。

カシオの小川さんとムサビの三代さんの出会いによって始まったこの1年目のプロジェクトは、「MAU日本語学習支援プロジェクト」と名付けられました。カシオの電子辞書をASEAN諸国の

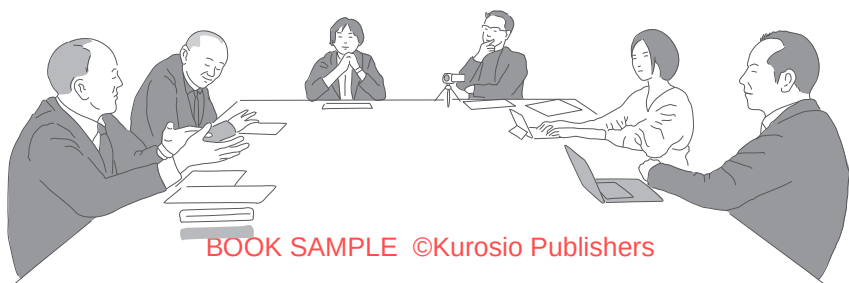
第

6

章

「座談会」

カシオにとっての産学、ムサビにとっての産学



なぜ、カシオがこのプロジェクトに取り組むのか

三代：学会等でのプロジェクトについて報告すると、「なぜカシオが行うのか」という質問を必ずもらいます。カシオがこのプロジェクトを行う意義はどこにあるのでしょうか。

大塚：カシオとしては、全社を挙げて教育事業に力を入れています。その中でも、電子辞書を中心に、語学教育は重要な位置付けです。今回、その中でも日本語教育に焦点を当てた取り組みということで、会社としてのメリットは非常にたくさんあります。具体的には、一つはやはり日本語教育市場のマーケティングの機会になっていることです。それからもう一つは、三代先生をはじめ、業界関係者の方々とのコンタクトがとれることによって、パイプをつくることができます。最後に、一番大きいものとしては、日本語教育に対する社会貢献を通じたカシオのブランディングですね。たぶん一番大きな目的は、これになっているんじゃないかなってというのが本音です。具体的に何がどうっていうことではなくて、やはりこういうことにカシオが全面的に、しかも言い方はすごいやさしいですけど、直接的なビジネスに直結しないという中で力を入れてやっているというところが、結果としてブランディングにつながっていくと思います。

奈良：プロジェクトに直接関わっている私たちは、社会貢献の一環として行うというものでいいじゃないかと思ってるけど、それだと会社を説得するには、なかなか難しいんじゃないかと思っ

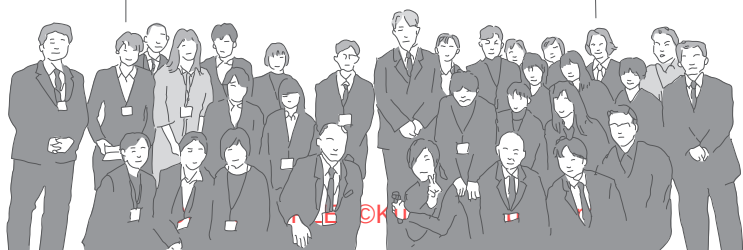
第

7

章

言語教育としての産学共同プロジェクト

CASIO X MAU



1. 産学で取り組むことばの教育

3年間のプロジェクト全体をふりかえって、ここで改めて、産学が連携し、協働でことばの教育に取り組むことの意義について考えたいと思います。

「はじめに」で触れましたが、産学連携による事業は、大きく研究開発を目的としたものと人材育成を目的としたものとに分けられます。⁽¹⁾ 先行研究の多くは、大学の研究をイノベーションに活かすことを視野に入れたものです。⁽²⁾ 一方で、人材育成の産学連携は、広義ではインターシップを含みますが、それを除くと先行研究は限られています。私たちのプロジェクトは、大きな枠組みでは人材育成を目的とした産学連携と言えます。6章の座談会でカシオの方々が、この産学は製品の開発など具体的なモノをつくることを目的としない点でユニークであると述べていました。このプロジェクトでは、産学が協働して、両者共に未知である「多文化共生社会」という新しい価値に続く道を探求します。学生たちの成長を第一におきながらも、同時に、新しい社会につながる新しい価値、つまり「コト」をデザインするための研究開発でもあるというところに、大きな特徴があります。そして、学生たちのコミュニケーション教育の先に新しい社会が広がるということが、ことばの教育を産学連携によって取り組む最大の意義だと私は考えています。

1章で、なぜこの活動が日本語教育なのかについて、言語教育に関するいくつかの理論的背景をもとに述べました。まず、私たちは社会参加の過程の中でことばを学ぶということがあります。そし